慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『中納言兼輔集』私注（三）
Sub Title	
Author	田中, 直(Tanaka, Sunao)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1988
Jtitle	三田國文 No.9 (1988. 6) ,p.45- 58
JaLC DOI	10.14991/002.19880600-0045
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19880600-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『中納言兼輔集』私注（三）

田中　直

24　もろともにわが①折[る]宿の梅②の花あか③ぬ匂ひを誰に見せまし

【校異】○詞書―[春部・梅]一首前（底本8）ノ詞書「はるかの宰相中将にてすみはへりけるさうしよりこうはいをおくりてはへりけるかへし」ガ掛カルカ（Ⅲ）　①わか折―わかみる（Ⅳ）　②梅のはな―桜花（類）　③あかぬ匂ひを―わかぬにほひを（Ⅲ）

【口訳】わたしとともに居る、拙宅の梅の花です。その枝を手折って、あくことない「匂ひ」を、どなたにご覧に入れましょうかしら。

【語釈】○もろともにわが折る　「折る」に「居る」を掛け、梅花への愛着の深さを示した。愛する女性になぞらえたものか。

○匂ひ　「見せまし」という結句からは、この「匂ひ」は色彩をいうものかとも思われ、したがって紅梅詠である可能性も濃い。梅花詠におけるこの語の用法、また、紅梅が兼輔愛好の花であったこと、前述したとおりである（→4【語釈】参照）。

○誰に見せまし　「雪ふれば木ごとに花ぞさきにけるいづれを梅とわきて折らまし」（古今集・冬三三七、友則）などとおなじく、仮想条件を示さず疑問語を受ける「まし」で、ある事態に直面しての内心のためらい、迷いを表したものと解する。本当は秘匿したいほどに美しいこの花を、さあ、どなたにお見せしましょうかねえ、という勿体ぶったポーズである。

【余説】4～9の梅歌群からは孤立した位置に置かれる。配列の乱れであろう。

京極の家の藤※の賀三月一日しけるに、三条の右大臣殿

25　限①りなく名②に負ふ藤※※の花なれば底③ひもしらず色④のふかさに

【校異】※（西）ニ「ふちにか」トスルヲ受ケ、底本「ふち（如本か）」。※※底本「ふしの花」。○詞書―京こくの家のふちの賀やよひのつこもりにしたまふに三条おとゝ（Ⅱ）―[底

本26ノ歌ニ続ケテ」おとゝの御うた（Ⅳ）　①限りなく―かぎりなき（Ⅱ・Ⅳ）　②なにおふ―なにあふ（類）　③そこひもしらす―そこひもしらぬ（Ⅱ）　④色のふかさに―いろのふかさか（Ⅱ）

【他文献】『後撰和歌集』巻三・春下一二五（やよひのしもの十日ばかりに、三条右大臣かねすけの朝臣の家にまかりて侍りけるに、ふぢの花さけるやり水のほとりにて、かれこれおほみきたうべけるついでに／三条右大臣／初句「限なき」、下句「そこひもしらぬ色のふかさに」）　『三条右大臣集』六（やよひのつこもりに中納言兼輔の京極の家におはしてやり水のほとりに藤のはなさかりなみけれはあるしのたまひける／下句「そこひもしらぬいろのふかさか」）

【口訳】限りなくも名高いこの家の、「淵」の名を負い持つ「藤」の花であるから、なるほどその色深さを見ると、底知れないまでの心持ちがしてくることです。（そのようにわれら藤原の栄華も悠久に続くことでしょう）。

【語釈】○京極の家　東京極賀茂川堤辺の兼輔邸。上京区寺町通り広小路上ル東側北之町蘆山寺境内に紫式部旧宅趾として伝えられるのがその跡かとされる。

○名に負ふ　「名に負ふ」「名にし負ふ」は、この時代、「名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」（古今集・羇旅四一一、在原業平）に代表されるごとく、Ⓐ「何々を名として負い持つ。そう名付けられている」という意で用いられるのが第一義的な用法であるが、

これやこの大和にしてはわが恋ふる紀路にありとふ名爾負背の山　（万葉集・巻一　三五）

いにしへゆ人のいひける老人の変若つとふ水ぞ名爾負滝の瀬　（同・巻六　一〇三四）

これやこの名爾於布鳴門のうづ潮に玉藻刈るとふ海人娘子ども　（同・巻十五　三六三八）

雲消えし秋のなかばの空よりも月はこよひぞ名に負へりける　（山家集三八〇、「九月十五日」）

昔より名に負ふ秋のなかばとて月はこよひぞすみまさりける　（続拾遺集・秋上二九一、忠教）

等の例に見える用法、すなわち、Ⓑ「有名だ。名に聞こえている」の意を併せ持っていると解するべきだろう。（Ⅱ）（Ⅳ）のように連体形「限りなき」とするならばともかく、底本「限りなく」で読む以上は、この意を酌まない解釈は無理がある。宿の主人である兼輔家の名声を賞讃しての措辞である。

○藤の花　「藤」に「淵」を掛け、「底ひ」「深さ」の縁語とする。同時に、この「藤」には、『八代集抄』が「兼輔も北家の藤原にて、冬嗣公の曽孫良門の孫、左中将利基の子なれば、かぎりなき名におふ藤とよみ給ふなり」と注するように、藤原氏の栄華を言祝ぐ含意が存するであろうし、あるいは、「咲く花の下にかくるる人多みありしにまさる藤のかげかも」（伊勢物語・百一段）の業平詠が意識裡にあったかもしれない。この季吟注について、『後撰集新抄』は「そはいかゞなる説にて、師［＝本居大平］も藤原のことにはかゝはるまじき歌なりといはれたり」と批判的であるが、「名に負ふ」を前記のごとくに解するならば、やはりこの季吟説は承認されて然るべきではないか。醍醐天皇の外戚として良門流が最も時めいた時代の誇らかな現世謳歌の詠である。

【余説】この藤花宴の年次は不明であるが、『後撰集』では貫之の同席が認められる（→29【余説】参照）ことから、村瀬敏夫氏は、「三者の息のあったやりとりから見て、貫之の叙爵後、おそらく延長年間のことではないか」（『古今集の基盤と周辺』二一七頁）、また、「貫之のみが召されているのを考えると、躬恒没後と目される延長四年以後のことであったかも知れない」（『紀貫之伝の研究』三五一頁）と推定されている。「限りなく名に負ふ藤の花」という定方の賞讃は、あるいは、兼輔家の誉望が頂点にあったであろう時代、すなわち、兼輔女桑子の入内（延喜二十一921～延長元923）から延長二924年の章明親王誕生前後にかけての時期が最もふさわしいかとも考える。

返事

26　色ふかく匂ひしことは藤波のたちもかへらず君①とまれとぞ

【校異】○三句「藤波の」ノ「の」以下、35ノ詞書「おとこのもとよりあふきえたる」迄、切リ取ラレテ現存セズ（西）　○詞書―かへしあるへし（Ⅱ）―【春部・藤】三月しもの十日京こくのふちのはなのえしはへりけるときかれこれまうてきてさけたうへけるついてに三条右大臣のうたのかへし（Ⅲ）―ふちの花見に三条のみきの大御のいますにきこゆる（Ⅳ）　①君とまれとそ―君とまれとか（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ）

【他文献】『後撰和歌集』巻三・春下一二六（一二五【家集底本25】ノ詞書ガ掛カル／中納言兼輔／五句「君とまれとか」）『三条右大臣集』七（かへし／初句「色ふかき」、五句「君とまれとか」）

【口訳】藤の花がかくも色深く咲き匂っているのは、藤波が立つ、ではありませんが、あなたが立ち帰ることなく、どうかお泊まりになってくださいと申しているのでございますよ。

【語釈】○藤波の　「藤波」は「藤の花。花房が風に靡くさまを波に見立てたもの。また、花に限らず藤をもいった」（時代別国語大辞典・上代篇）。万葉以来の歌語で、ここでは四句「たちもかへらず」を導く。「立つ」「かへる」は「波」の縁語。

また、大臣（おとゞ）、夜明「け」にけり

27　きのふみし花の顔（かほ）とてけ①ふみれば寝（ね）②てこそさらに色まさりけれ

【校異】○該歌ナシ（Ⅲ）　○詞書―おとゝまた（Ⅱ）―そのよはとまりてまたのあしたおとゝ（Ⅳ）　①けふみれは―けさみれは（Ⅱ・Ⅳ）　②ねてこそさらに―きてこそことに（Ⅳ）

【他文献】『後撰和歌集』巻三・春下一二八（ことふえなとしてあそび、物がたりなどし侍りけるに、夜ふけにければ、まかりとまりて／三条右大臣）『三条右大臣集』九（かくて管弦してあそひ給ひてよふけにけれはそのよまり（歟）てあしたによみ給へりける／二句「花のかをとく」、三句「けさみれは」）『師輔集』七九（兼輔朝臣の家にてあそひしものかたりなとしくらしてかへるとて／二句「花のかほにて」）

【口訳】「昨日見たあの花の顔は？」と思って、今日見てみると、一晩共寝していっそう色鮮やかになっているよ。

【語釈】○花の顔　「藤花を、女の容儀の如くとりなして、一夜寝て馴れつれば、又今朝はことさらに色のまさりて見ゆることよとなり」（後撰集新抄）。漢語「花顔」の翻訳語。「十五入二漢宮一、花顔笑二春紅一」（李白・怨歌行）、「雲鬢花顔金歩揺」（白居易・長恨歌）等、美しい女性の容姿の形容として用いられるのが一般的な語であった。『源氏物語』若紫での北山の聖の歌、

奥山の松のとぼそをまれにあけてまだ見ぬ花の顔を見るかな

も、源氏の君の美貌を「花の顔」といった例であるが、平安期の漢詩にあっても、たとえば、

朝来尋遂見二花顔一（田氏家集・下）

花顔片々咲来多、冒雨馨香不二奈如一（管家文草・巻二）

のごとく、これを逆転させて、花を美人に喩える擬人化表現が見えている。

桜花露にぬれたる顔見れば泣きて別れし人ぞ恋しき

（拾遺集・離別三〇二、読人不知）

のような歌も、こうした漢詩的発想に基づくものであったのだろう。この定方詠もまた同様に、一夜おいての藤花を共寝した翌朝の女性になぞらえることで、一首に艶めいた気分を添えているのである。

とあれば、又

28　一夜のみ寝（ね）てしかへれば藤の花こゝろとけての色みせ①むやは

【校異】○該歌ナシ（Ⅱ）　○詞書―【春部・藤】かくあそひあかしてとのもとまりたまてつとめてのたまへるかへしに（Ⅲ）―かへしに（Ⅳ）　①色みせむやは―いろみえんやは（Ⅳ）

【他文献】『後撰和歌集』巻三・春下一二九（一二八【家集底本27】ノ詞書ガ掛カル／兼輔朝臣／二句「ねてしかへらは」、四句「心とけたる」）　『三条右大臣集』一〇（かへし　中納言兼輔／四句「こゝろとけたる」）　『師輔集』八〇（かへし／下句「こゝろとけたるいろをみせんや」）

【口訳】たった一晩共寝したきりでもうお帰りになるなんて、そんなでは藤の花だって、心からうちとけた色を見せてくれますかしら。（一晩じゃ駄目です。どうかもう一泊していってください）。

【余説】前歌の擬人化表現を受けた。女性だって、一夜きりのつきあいでは本当にうちとけた態度をなかなか見せてはくれないように、藤の花の真の美しさは一晩じゃわかりませんよ、と定方をなおもひきとめようとした歌。

又

29　いたづらに明（あ）けばあやなし郭公鳴（ほとゝぎす）[く]を待（ま）つとて君は①とゞめむ（ん）

【校異】○該歌ナシ（Ⅲ・Ⅳ）　○詞書―かへし（Ⅱ）　①君はとゞめん―きみをとゞめん（Ⅱ）

【口訳】（いまだ充分に語りあってもいないのに）むなしく夜が明けてしまうなんて、ずいぶんなことですよ！　（今度はこの藤波に）時鳥（ほとゝぎす）が来鳴くのを待つにかこつけ、あなたをばお引き止めいたしましょう。

【語釈】○郭公鳴くを待つとて　「わが宿の池の藤波咲きにけり

山時鳥いつか来鳴かむ」（古今集・夏一三五、読人不知）を踏まえる。この古歌により、藤の次は時鳥という季題の移行が通念化していた。

【余説】続く30～34の時鳥歌群に連繋される。このあたり、かなり緊密な構成意識を見せているといえるだろう。

25から続いた藤花宴歌群については、諸本間でいくつかの歌の欠脱と歌序の異同が見られるが、《表A》にそれを一覧する。◇を付したものは底本にはない歌である。

また、『後撰集』にあってはこの宴席に紀貫之の列していたことが認められる。次に、その一連の唱和の全体を掲げる。

やよひのしもの十日ばかりに、三条右大臣かねすけの朝臣の家にまかりて侍りけるに、ふぢの花さけるやり水のほとりにて、かれこれおほみきたうべけるついでに　三条右大臣

限なき名におふふぢの花なればそこひもしらぬ色のふかさか　兼輔朝臣

色深くにほひし事は藤浪のたちもかへらで君とまれとか　貫之

棹（さを）させどふかさもしらぬふぢなれば色をも人もしらじとぞ思ふ　三条右大臣

ことふえなどしてあそび、物がたりなどし侍りけるほどに、夜ふけにければまかりとまりて

昨日みし花のかほとてけさみればねてこさそらに色まさりけれ　兼輔朝臣

ひと夜のみねてしかへらば藤の花心とけたる色見せんやは　貫之

あさぼらけしたゆく水はあさけれど深くぞ花の色は見えける　（後撰集・春下一二五～一三〇）

貫之の両首は、いずれも兼輔・定方という両貴紳に陪従する幇間詠的な要素を保ちつつも、表現の質としては、両者の詠を平懐と思わしむるにたる技巧に支えられている。だが、当時すでに『古今集』撰進を終え、名実ともに歌壇の第一人者としての地位を固めていたであろう貫之の作を、兼輔・定方の家集がともに省いていること、のみならず、『後撰集』や『貫之集』には伝えられる兼輔と貫之との親しい関係を語った贈答歌は、ごく少数の例外を除いて、ほとんどが本集には収載されていないという事実は、どのように考えられるべきであろうか。それは、本集のかなり本質的な性格にかかわってくる問題でもあろう。

本集の成立は、『三条右大臣集』の成立ともきわめて密接な関係にあるとされ、同一人物の編になった可能性、さらにそれは兼輔自身ではなかったかという可能性も濃い。その両集がともに、貫之の作詠をあきらかに排除しているのである。このことは、必ずしも、藤岡忠美氏のいわゆる「小世界」的交遊圏の存在を否定するものではなく、その階級的な限界性を示しているにすぎない。すなわち、「家」集としての『兼輔集』の総体的な文脈形勢を図るとき、編者にとって貫之という専門歌人はさほど必要不可欠の存在とはいえなかった。本集が形成しようとした「家」集的世界とは、あくまで、宇多―醍醐と連なる天皇家に対しての外戚としての身内的な血族意識によるものであったことを、この事実は意味しているのではないか。やはりこの貫之歌排除の問題に注目して、阿部俊子氏が「現存兼輔集が類別的な歌集であることも考えあわせて、兼輔を一人の独

《表A》

底本系	(Ⅱ)	(Ⅲ)	(Ⅳ)	三条右大臣集
25(かぎりなく)	京こく家のふちの賀やよひのつこもりにしたまふに三条おとゝ かきりなき……	三月しもの十日京こくのふちのはなのえしはへりけるときかれこれまうてきてさけたうへけるついてに三条右大臣のうたのかへし	ふちの花見に三条のきの大御のいますればきこゆる	やよひのつこもりに中納言兼輔の京極の家におはしてやり水のほとりに藤のはなのさかりなみ[り敗]けれはあるしのたまへりける かきりなき……
26(いろふかく)	かへしあるへし いろふかく……	いろふかく……	いろふかく……	かへし 色ふかき……
27(きのふみし)	きのふみし……	かへりたまはむとすれは	おとゝの御うた かきりなき……	中納言又そへてつかはしける
28(ひとよのみ)	またかへし ◇あかぬまに君かへらす□ふちのはなかけてさらにやこひわたるへき	◇あかぬまにきみしかへらはふちのはなかけてさらにやこひわたるへき	かへし ◇あかぬまにきみしかへれはふちのはなかけてさらにやおもひわたらん	◇あかなくに君かへりなはふちの花かけてさらにや恋わたるへき
29(いたづらに)	かへし いたつらに……	かくあそひあかしてとのもとまりたまてつとめてのたまへるかへしに ひとよのみ……	きのふみし…… かへしに ひとよのみ……	かくて管弦してあそひ給ひてよふけにけれはそのよ[と敗]まりてあしたによみ給へりける きのふ見し…… かへし 中納言兼輔 ひとよのみ……

立性のある貴族歌人として、その家集を、安易な生活の中でまとめたものでなく、格式ある歌人の集としてまとめようとした意図から生じた結果と考えることが許されないであろうか」（「中納言兼輔集雑考」国語と国文学、昭45・7）といわれるのも同様の視点によるものであろうかと理解している。そこにあって和歌とは、言語芸術として自立して表現の質を問われるといった性質のものではなく、宮廷を中心とした生活におけるいわば社交的な道具立てとして、和歌によって記念される生活の記録としての意味を第一義とするところのものであった。そして、このことはまた、あるいは『後撰集』という特異な勅撰集の基本的な性格とも、かなりの程度共通しているのではなかろうか。「芸術そのものはそこにはないが、芸術的生活は確かに存在する」（「後撰和歌集の表現」女子大文学・国文学篇第十六号、昭39・11）という片桐洋一氏の『後撰集』評価の言は、本集についても適合するところの多いものであると考えるのである。

25の定方詠には「ありしにまさる花のかげかも」の業平詠が意識されているのではないか、と前述したが、26から続く定方をひきとどめようとした兼輔の一連の詠みぶり、ことに、《表A》に◇を付した底本非収載歌「あかぬまに君しかへらば藤の花かけてさらにや恋ひわたるべき」（Ⅲ本による、『三条右大臣集』では初句「あかなくに」）には、どこかしら、かの惟喬親王が寝所に行こうとするのを惜しんでの業平詠、「あかなくにまだきも月のかくるるか山の端逃げて入れずもあらなむ」（伊勢物語・八十二段）の面影がないであろうか。『伊勢物語』のこの一段の歌物語の影響は、13の【余説】においてすでに指摘し、兼輔・定方また敦慶親王らにおける〈風雅〉の理想形が業平・惟喬親王・紀有常らにおけるそれとして思い描かれていたであろうことを述べておいた。この藤花宴の唱和では、表現上の類似こそ希薄でしかないが、彼等の意識のどこかにこの歌物語的世界が投影されていたのではないか、という可能性はやはり考慮に入れておいてよい。ただ、業平らの〈風雅〉が、初期藤原摂関政体制からは疎外された者たちの脱俗的な行為として哀感のなかで輝くものであったのに比して、兼輔らのそれを支えた意識とは、皇室権力に対し外戚としての関係を保ち、その関係を強化しようとする摂関政内部での上昇志向によるものであったこと、両者は相似形を描きながらもあくまで対照的であった。「ありしにまさる藤のかげかも」という業平詠における藤原摂関政体制への抵抗表現の影響が、ここでは「限りなく名に負ふ藤の花なれば」という藤原氏の繁栄への祝福と自負の表現となって表れている点、まさしく象徴的であるといえよう。和歌による自己表現の生む実生活に対する緊張感の度合いが、両者では明らかに異なっている。兼輔交遊圏を「古代風で浪漫的な色彩を帯びた一つの小世界」（「古今から後撰へ―和歌史における屈折の一時期―」『平安和歌史論』所収）とされた藤岡忠美氏の言は、この点においては若干の修正を加えられるべきかと考えている。

以上で、春の部終わる。

桂御息所（かつらのみやすむどころ）のなにごとにか奏（そう）せさせ給（たま）ひて、返事（へんじ）おそしとうらみ給ひければ、返事に

①つゝむべき程ならなくに郭公（ほとゝぎす）五月待つまの音にこそ

※②（ね）

30

※※あるらし

【校異】※底本「なにこそ」。諸本ニヨリ訂ス。　※※底本「有らしん」。　○錯簡アリ。下句「いかゝしてかはふる聲のする」［31ノ下句］トシテ、31番歌ナシ（類）　○詞書―かつらのみやす所おほやけに□せ給ことおそしとてうらみさせ給へは（Ⅱ）―［夏部・郭公］かつらの更衣そうせたまへるかへりことおそしとうらみたまへるに（Ⅲ）―桂宮のおほやけに申させ給事あるかゝへりことおそくきこゆとてうらみたまふに（Ⅳ）　①つゝむへき―うらむへき（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ）　②なにこそ―ねにこそ（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ）

【口訳】桂御息所が、何事であったのでしょう、（主上に）奏上なさっていたところ、その返事が遅いといってお恨みになった歌をお寄せあそばされましたので、その返歌に／もう遠慮して鳴くような季節でもないというのに、この時鳥は、五月になるのを待っている頃の忍び音で鳴いているようですね。

【語釈】○桂御息所　宇多第四皇女孚子内親王、またはその母か。孚子は、『本朝皇胤紹運録』に「号二桂宮一」とし、母は桓武天皇孫十世王（従三位参議）の女とされる。生年不詳。歿年につき、『一代要記』は天暦二948年九月二十八日、『日本紀略』は天徳二958年四月二十八日とする。異母兄敦慶親王との交渉を伝える歌物語が『大和物語』二十・四十段に見え、親王を介して兼輔らとも交流があったものかと推察される。「桂宮」とする（Ⅳ）の本文ならばこの内親王と確定されるわけだが、底本及び（Ⅱ）に「御息所」、また、（Ⅲ）に「更衣」とすることどのように考えるべきか。『大和物語』七十六段には、

桂のみこの御もとに嘉種がきたりけるを、母御息所きゝつけて、門をさゝせたまうければ……

とあり、ここからは孚子が母親と同居していたらしいことがうかがわれる。「桂」の号は地名に由来するものであろうから、この母が「桂御息所」と称されていた可能性も考えられよう。ただし、『一代要記』の宇多女御列記のなかにもこの女性は記載なく、『紹運録』も十世王の子としては「時世王」「時相王（五位）」と記すのみである。

○つゝむべき程ならなくに　「つつむ」は、気がねする、行動を抑制する意。時鳥が五月以前に鳴き音を忍ぶことをいったものであろう。もうそんな時期でもないのに、というのだから、この歌の詠作は五月に入ってからのこととなるが、そのあたりの事情は詞書からは不明瞭である。

○五月待つまの音にこそあるらし　底本「なにこそ」では解釈不能。諸本により訂した。「五月待つまの音」は、時鳥が五月になって人里に降りて来る以前の、いわゆる「忍び音」。「桂御息所」が天皇の返事の遅いことへの恨み言を、天皇にではなく兼輔に対して詠んでよこしたのをさして、遠慮なさらないでもっと堂々とおっしゃればよいのに……と、おりしも五月の鳥である時鳥によそえていったものか。

【余説】詠歌状況の不明確さにより、確定的な解釈のむつかしい歌。ここでは試解を示した。「桂御息所」が奏上した案件の何であったかはわからぬが、「御息所」当人としては、兼輔に天皇への取継ぎを依頼したかったのではあるまいか。この返歌は、それをやんわりと拒絶したものではなかったか、と想像している。

はやうあひしれりける人の物語（ものがたり）などしけるほどに、郭公の鳴[き]ければ

31　いにしへのこと語（かた）らへば郭公（ほととぎす）いかにしりてかふるこゑのする

【校異】※底本「如何してか」。諸本次ノ如シ。いかゝしてかは（類）―いかにしてかは（Ⅱ）―いつならひてか（Ⅲ）―いかにしりてか（Ⅳ）。（Ⅳ）及ビ『古今和歌六帖』ニヨリ訂ス。（本ノママ）○詞書―ひはとのにまてたりけれはむかしものかたりし給とて北面によひあはせてふることゝもありけるなかに（Ⅱ）―はやうあひしれるひとゝものかたりしはへりけるほとにほとゝきすのなけは（Ⅲ）―ひはとのゝきたのかたにたいめんしてものかたりきこゆるほとにほとゝきすのなけは（Ⅳ）

【他文献】『古今和歌六帖』五・雑思二八〇四（作者名表記ナシ、四句「いかにしりてか」）

【口訳】過ぎ去った昔のことを語りあっておりますと、時鳥は、いったいどうしてわかるのでしょう、昔のままの鳴き古した声で鳴いています。

【語釈】○はやうあひしれりける人　（Ⅱ）（Ⅳ）の二本では、この「物語」の相手は、枇杷左大臣仲平「北面（きたおもて）」「北の方」と伝えられる。仲平室は、その出自等いっさいが不明だが、しんみりとしたこの歌の情調と相俟って、やや穏やかならざる事情を暗示している。

○ふるこゑ　必ずしも語義の明確ではない歌語であり、平安期和歌では時鳥についてのみ用いられる。

a五月待つ山時鳥うち羽振（はぶ）きいまも鳴かなむ去年（こぞ）のふるこゑ

（古今集・夏一三七、読人不知）

を初出とし、

bあたらしく照る月かげに時鳥ふるこゑしるく鳴きわたるなり

（躬恒Ⅰ　一一〇）

c五月雨の長雨にぬれて時鳥ことしさへにやふるこゑをせむ

（高明　一一）

といった例が見える。aの古今歌では、五月に入ったら鳴こうとして待機している時鳥に対し、「いますぐに鳴いて欲しい。去年のままの鳴き古した声でいいから」と希求する。すなわち、五月以前の時鳥の鳴き音は、いまだ今年の声になっていない「古声」であって、今年の新しい鳴き音は五月以降のものと考えられているわけである。万葉時代、時鳥は「霍公鳥者、立夏之日来鳴必定」（万葉集・巻十七、三九八四左注）と立夏に初声をあげるものとされていたのが、平安時代では「五月こば鳴きもふりなむ時鳥まだしきほどの声を聞かばや」（古今集・夏一三八、伊勢）、「いつのまに五月来ぬらむあしひきの山時鳥今ぞ鳴くなる」（同・夏一四〇、読人不知）と、五月朔日をその年の活動の起点とするものという通念に変化し、以後固定する。その通念のなかでは、五月朔日が時鳥にとっての年の改まる日であり、それまでの鳴き音は旧年に属することになる。aの古今歌を読むかぎりでは、「ふるこゑ」とはそのような文脈のなかで解しきれ、実態としての「ふるこゑ」は、『和泉式部日記』に、

［四月］晦日（みそか）の日、女、

ほととぎす世にかくれたる忍び音をいつかは聞かむ今日も過ぎなば

と聞こえさせたれど、人々あまたさぶらひけるほどにて、え御覧ぜさせず。つとめて、もて参りたれば見たまひて、

忍び音は苦しきものをほととぎすこだかき声を今日よりは聞け

とある五月朔日を挟んでの贈答に見えるごとき「忍び音」と、ほぼ同様のものと考えてよい筈である。

だが、b・cの二首の例における「ふるこゑ」は、「忍び音」とはまた別の実態を言ったもののように思われる。bの躬恒詠でのこの語は「あたらしく照る月かげ」との対句として詠み込まれているわけだが、新月の照る夜空を渡って行く時鳥が四月の山時鳥でありえよう筈はない。そして、cの高明詠の時鳥は、五月雨に濡れたがために、すでに五月（時鳥にとっての「今年」）に入っているにかかわらず、旧年のままの「ふるこゑ」で鳴いているのである。これらの例から推察されることは、「ふるこゑ」とは、苦しげで、元気のない、弱々しい鳴き音ではないか、ということである。五月以前の、まだ鳴き慣れていない声が「ふるこゑ」であるのだが、五月の時鳥も、時としてそのように鳴く、もしくは鳴くと感ぜられることがあり、それをもやはり「ふるこゑ」と呼んだのではあるまいか。

懐かしい昔を回顧する語らいの最中、夜空を渡って行く時鳥の、常とは異なった弱々しい鳴き音が聞こえたのである。私達の話題と、その懐旧の情とが何故わかったのだろうかという、沁々とした佳詠である。この「物語」の相手が仲平室であったとすれば、その女性はかつて兼輔と恋愛関係にあったものか、とも想像される。

32　物おもひしけるころ、※ほとゝぎすをきゝて

郭公（ほととぎす）鳴［き］のみわたる①夏山のしげくも物（もの）を②おもふ比（ころ）かな

【校異】※底本「ほとゝす」。　○詞書―ものおもへるほとに郭公をきゝて（Ⅱ）―［恋部・被知］おもふことあるころほとゝきすをきゝはへりて（Ⅲ）―ものおもふころほとゝきすをきゝて（Ⅳ）

①夏山の―なつ山に（Ⅱ）　②おもふ比かな―しのふ比かな（類）

【他文献】『万代和歌集』巻十二・恋四　二二四七（題立らず／中納言兼輔）

【口訳】時鳥が、声ひたすらに鳴き渡る夏の山――その木々の「繁し」ではないけれども、しげく物思いに耽るこの頃であるなぁ。

【語釈】○郭公鳴きのみわたる夏山の　この上句全体が、四句「しげくも」を導く有心の序。「のみ」は強調。時鳥の悲しげな鳴き音が、恋の物思いを助長するというのは、「何しかもここだく恋ふる時鳥鳴く声きけば恋こそまされ」（万葉集・巻八　一四七五）、「時鳥初声聞けばあぢきなく主さだまらぬ恋せらるはた」（古今集・夏一四三、素性）、「夏山に鳴く時鳥心あらば物思ふわれに声な聞かせそ」（同・一四五）等、枚挙にいとまない。

【余説】前歌の恋の気分がうけつがれるあたり、巧まざる配列の妙といえよう。相模の「あとたえて人もわけこぬ夏草のしげくも物を思ふころかな」（相模Ⅰ　五四二、新勅撰集・雑一　一〇五八）など、この兼輔詠が影響するか。

公　所に忍びに来ける　男　の、え隠れあへで、
「誰ぞ」などいひさわがれけるをきゝて
33　人しれぬ宿にすみせば　郭公　うき五月雨はしられざらまし

【校異】○詞書―おほやけところにしのひて人のもとにきけるおとこのえかくれあへて人にみつけられてそれはそらとのゝしるをきゝて（Ⅱ）―［夏部・郭公］おほやけところにをとこのはたかくれあへてそれそなといひさわかるゝをきゝて（Ⅲ）―公所本にてしのひてひとのもとにいきけるおとこのみかくれあへて人にみえつけられてその人そとのゝしらるゝをきゝて（Ⅳ）

【口訳】宮中（の女官のもとに）忍んで通ってきていた男が、（人に見つけられて）隠れおおすことが出来ずに、「誰だ」などと言いさわがれていたのを耳にいたしまして／人知れない家に通っていたのだったら、この時鳥だって、こんなにもつらい五月雨を経験するようなことにもならなかったでしょうに。

【語釈】○人しれぬ宿にすみせば　「公所」の女に通っていた男に対して、宮中という人目につく「宿」でなく、ありきたりの里住まいの女のことを「人しれぬ宿」と言ったのである。「すむ（住む）」は、通い婚における一段階で、「通ふ」状態が定着して、男女が恒常的な夫婦生活を送るようになること。

○うき五月雨はしられざらまし　密通を発見され、騒ぎ立てられる事態を、五月雨の鬱陶しさに喩えた。「五月雨の声もとどろに時鳥なにを憂しとか夜ただ鳴くらむ」（古今集・夏一六〇、貫之）等、時鳥は、五月雨との取り合わせで詠まれることが多い。

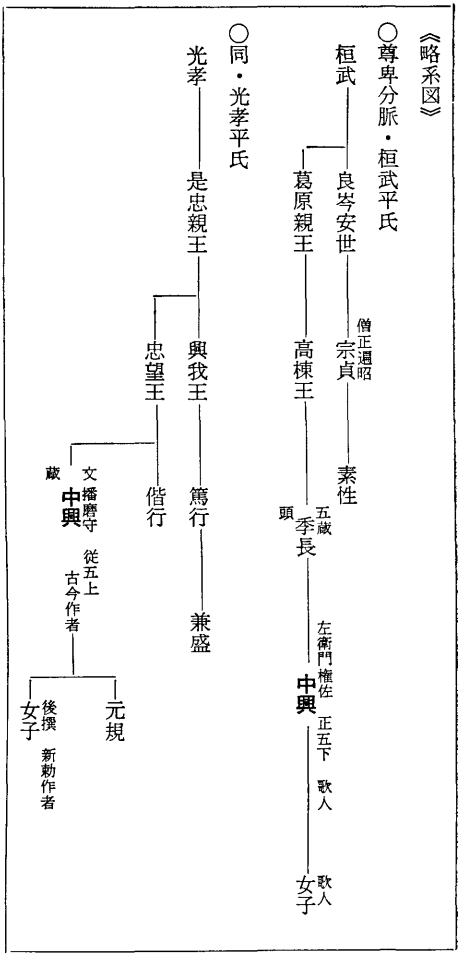
平中興が播磨よりのぼりて、※はることありていままでまいらぬ、といひたる返事に
34　時鳥　鳴［き］まふ里のしげゝれば山辺に声のせぬもことわり

【校異】※底本「さはかこと」。　○詞書―平のなかきかはりまよりのほりさたすること有ていままてまいらぬといひたる返事に（類）―平のなかきかはりまよりのほりてさたする事ありてなんいまゝてこぬといへる返事に（Ⅱ）―［夏部・郭公］「たひらのなかきかはりまのくにゝきてさはることありてなんいまゝてまうてこぬといひてはへれはつかはすうた二首／ほとゝきすうきさみたれのなけきにはたえてこゑせぬものにそありける（該本特有歌）」ヲ受ケル（Ⅲ）―［底本33ニ続キ］おなしころ平のなかきかはりまよりのほりてさはることありてなむまいらぬといへるかへりことに（Ⅳ）①鳴まふさとの―なきふるさとの（Ⅱ）―なきぬるさとの（Ⅲ）―なきゆくさとの（Ⅳ）

【口訳】平中興が播磨国から帰京した際、（帰京後しばらくしてから）、「さしつかえがあって、今まで参上できずにおりました」と言ってきた返事に／時鳥は、鳴いてまわる里がたくさんあるのでしょうから、こんな山深い里に鳴き声がきこえないのも、無理もないことですよ

【語釈】○平中興　桓武平氏。生年未詳―延長八930年歿（『勅撰作者部類』）。桓武曽孫右大弁季長男として生まれ、光孝孫忠望王の養子となる（『略系図』参照）。勅撰集には、『古今』二首（一〇四

《略系図》



八・一〇五〇)、『後撰』二首(七二二・一〇七九)の計四首が入集し、その女も、勅撰集に四首(後撰八〇三・八三二・八四一、新勅撰八七六)、また、『大和物語』五十七・百五・百六段にも名を残す歌人であった。

○播磨よりのぼりて　中興の官歴は、『古今和歌集目録』によると、次のとおりである。

昌泰元年十二月八日、補蔵人。二年補文章生。父譲。八月任少内記。同月二十日、転大内記。延喜三年正月十一日兼近江権少掾。四年正月七日、叙従五位下。二十五日、任遠江守。十年正月十三日、任讃岐守。十五年正月七日、叙従五位上。国給。十二日、任近江守。十九年正月十八日、任左衛門権佐。二十二年正月三十日、任美濃権守。

ここに中興の播磨守任官は記されていないが、極官を記すことの多い『尊卑分脈』(光孝平氏)にも「播磨守」とされていることから、『目録』の記事の終わる延喜二十二922年から、前記した『勅撰作者部類』に記される中興の歿年延長八930年までの数年間、美濃守を任期どおり四年勤めたとすると、延長四926年以降、すなわち中興最晩年の任かと思われ、当時兼輔はすでに参議(延喜二十一921年任)、もしくは中納言(延長五927年正月任)に昇っていた。

さらに、この官歴からは次のことが推察される。

中興は、昌泰元898年十二月蔵人に補されるが、兼輔が延喜二902年正月従五位下に叙せられるまで、同じく六位蔵人として二人は蔵人所にあった。また、延喜十五915年正月中興は近江守に任ぜられるが、兼輔は延喜十四914年正月より近江介を兼官している。二人の交遊は、六位蔵人の時代に遡るものと思われ、その後中興が地方官を歴任していた時代にも、

外吏にしばしばまかりありきて殿上おりて侍りける時、兼輔朝臣のもとに送り侍りける　　平　中興

よとともに岑へふもとへおりのぼりゆく雲の身はわれにぞありける

(後撰集・雑一　一〇八〇)

といった歌に見られるように、親密な交際が続いていたらしい。

○鳴きまふ里のしげければ　複合語「―まふ（舞）」は、ぬかりなく動きまわる、の意。他にも鳴いてまわる里がたくさんあるだろうから、こんな山里（兼輔邸をいうか）に訪れがないのも無理なかろうよ、というこの下句の持つ含意については、兼輔交遊圏の本質的な性格の問題と絡んで、かつて工藤重矩・藤岡忠美の両氏の間で論争が交わされたことがある。すなわち、この兼輔詠を、

「御機嫌伺いする所が沢山あって忙しいのだろうから、こんな山奥までやってこないのももっともなことだ」という程の意である。「山辺」とは粟田の邸を言うのであろうが、それは「里」、つまり洛中の権門に対してことさらに強調したものであろう。「鳴まふ」「ことわり」ということばも皮肉を含んだ表現であろう。（「藤原兼輔伝考（二）」語文研究・第三三号、昭47・5）

として、昇進のため洛中の権家をまわることに忙しい中興への兼輔の皮肉を表した詠と解された工藤氏に対して、藤岡氏は、時鳥が恋愛と結合した連想を起こさせることの多い景物であること、さらにこの歌の上句が、

時鳥汝が鳴く里のあまたあればなほとまれぬ思ふものから　（古今集・夏一四七、読人不知）

という、『伊勢物語』四十三段に賀陽親王が女の浮気心を責めて詠んだ歌として収められている古歌を踏まえての表現であることを指摘された上で、

「何しろほととぎすのように、あなたには愛する人がたくさんいるようだから」と、相手の浮気心を責める恋歌まがいに仕立てることによって、中興の色好みな多情をからかう趣向にしたものであるといえる。本歌にあたる右の歌は、伊勢物語に入るほどに知られていたわけだから、中興がこの本歌を連想するだろうことは間ちがいなく、兼輔はこうした恋歌まがいに仕立てることによって、中興の無沙汰を深刻にとがめぬようなユーモラスな配慮を用いたものであろう。（略）そこにはやはり親しい者同士における贈答歌の機智を見るべきであって、たんなる弾劾や皮肉を主題とするものであっては、贈答歌としての機能をもそもそも成り立たせるものではなくしてしまうという現実をも、考えなくてはならないであろう。（「藤原兼輔の周辺―いわゆる『小世界』の問題に触れて―」国語と国文学、昭和48・1）

と反論された。「汝が鳴く里のあまたあれば」という古今歌との類似性は疑いえないものがあり、多情な女を責める恋歌を擬いたものだとする藤岡氏の見解は、やはり説得力がある。中興は、『古今集』に入集する二首がいずれも誹諧歌であることからも、誹諧性の強い歌に秀でた歌人であったと思われる。6・7の玄上との紅梅をめぐる贈答にも見たように、家柄・階級を越えた歌の機知による戯れ合いを許容するところに、兼輔を中心とした歌人グループの交遊の特色が存したのであり、当該歌もまた、そのような文脈のなかでこそ読まれるべきものであろう。したがって、中興の無沙汰がたとえ洛中の権家をまわるに忙しかったためであったにせよ（その可能性は大いにあろう）、兼輔詠はそれに対して直截な厭味を言ったのではなく、古歌を踏まえた恋歌仕立ての形をとることで、かえって相手のもうしわけなさを緩和する効果をも狙ったものであったとさえい

えるのではなかろうか。

〔付記〕　本稿は、本誌第七号（昭62・6）に掲載されたものの続稿である。